

吉田美保子（令和五年七月号）

母は知る上海航路の船はみな機雷に触れて沈没せしを

夏がきて満洲航路の熱河丸^{ねっかまる}三等切符をようやく手にす

はじめての三等船室 出航のドラの音もなく見送りもなし

船底に身重の母は眠りこみ丸窓からの光に目覚む

一面に広がる海を想いしに乗り込みし時の川岸の見ゆ

揚子江河口に二日熱河丸停泊のまま暑さ極まる

駆逐艦二隻に護られ三日後に船は出航日本を目指す

二日過ぎ三日すぎるも海の上そのうち日数^{ひかず}わからなくなる



●作者の言葉

一〇四歳で亡くなった母の遺品を整理してましたら子どものころよく聞かされた帰国についての記録が出てきま

した。懐かしくまたさらに詳しい事情もわかりましたので詠んでみました。弟を出産するための上海からの帰国でした。熱河丸には

私も乗船していたのですが、二歳のことでも覚えていませんでした。けれども記録を読むうちに自分が母と一緒に乗っているような気分になりました。この受賞を母はとても喜んでいと思います。

黒岩剛仁先生、ありがとうございます。

●選者の言葉

昨年七月号〜本年六月号で私が特選に選ばせて頂いたのは、計四二人。複数回選んだのは、平川喜代子、松元雅子のお二人だった。しかしながら、複数回特選に選んだことは、たまたまの結果でもあるわけで、一年分の自らの選歌欄を今一度読み返した。

最終的には、昨年七月号の吉田美保子作、十二月号のアダムス理恵作（アダムスさんは、昨年の年間選者賞でも最後まで悩んだ。二年続けてゴメンナサイ）、本年四月号の松元作のいずれかを選択することとなり、結果としては吉田作を選ばせて頂いた。

満州から引き上げて来られた母君のドラマを、まるで現場で目の当たりにしているかのように歌った力作だった。〈船底に身重の母は眠りこみ丸窓からの光に目覚む〉。

大谷ゆかり

（令和五年七月号）

エプロンの母に抱きつく感触がさっきのような 五歳はさっき

「特別」は重たき翼ようやくよくに特別面会許可が下りたり

故郷の母の巡りにあるものがなくないものがある部屋白し

口腔をそろそろと撫ず棒つきの飴に似ているすぼんじぶらし

お母さん、父と私と妹をうつむく向日葵にしないで

大風が微風の経路をふいにせり出口さがして狂いゆく蝶



●作者の言葉

コロナ禍が尾を引き、病院の面会許可は病状が差し迫るまで出なかった。突然現れた私に母は「あんた、なんで来

たん？」と優しく訊ねた。「車

で来た」と答えたのだが「なぜ」という意味だったのかもしれない。

一首目の歌は母への手紙と

一緒に棺に入れた。四首目のスポンジブラシは介護士の志水さんが勧めてくれたもの。五首目の「向日葵」は母の名前が「陽子」だから。病の母の歌で年間選者賞を頂くことにその重みを感じている。

佐佐木朋子先生、有難うございました。

●選者の言葉

大谷さんの表現は儂いほどに優しい、そんな印象がわたしにはある。表現は人なりだから、その特質が大谷さん自身なのだろうと思う。七月号の作品はそこを踏み出したように思えた。

家族のみんなを「うつむく向日葵にしないで」という精一杯のお願い（抗議ではない）、母親への依頼である）や、蝶が飛び回るための「微風の経路」を「大風」が閉ざしてしまった状況を恨む気持ちは（いや、恨む気持ちは無くても、自然の力の前で驚いて、そのまま出口無しの状況を受けいれているのかもしれない）、どこかで解消されるのだろうか。

その心の行くべきを言葉が模索しているのだろう。

横山代枝乃

（令和五年七月号）

朝あしたより囀り聞こゆ若葉より風はやさしく春の雨降る

なまぬるき風は黄沙を運び来し日本列島避け難き位置

裏庭に出づれば匂ふ水仙に疲れし心ほぐれゆくべし

流れゆく水の如しも現世うつしよは曇りて風吹き花散り急ぐ

笑まひ良きやさしく清き君なりき古き律義な心持ちぬし

手をつなぎ「君よ知るや南の国」よく唄ひたる中学生のころ

鎮魂歌なれと唄はん「おお雲雀ひばり」思へば鳴き声遠く聞かざり



●作者の言葉

数年前、帯状疱疹に罹患してより全快しないよう、神経痛などで何をするにも億劫で、欠礼を重ねております。

せめてメール題詠一首でもと
思っていましたら「若葉」の
題が目にとまり、人生の若葉
の頃がとても懐しく思い出さ
れました。あの頃は終戦直後

の貧しい中学生でしたが、新生日本の復興へと希望に燃えておりました。互いに手に手を取って宝ジェンヌの真似ごとよろしく歌ったり踊ったり、元気で頑張ったものでした。その頃の歌も今は鎮魂歌となつて懐しく歌っています。

●選者の言葉

作者は今年九十歳近くになるだろうか。どこかでお会いしたかどうか記憶は無いが長く本誌で作品と出会っている。

なまぬるき風は黄沙を運び来し日本列島避け難き位置

流れゆく水の如しも現世うつしよは曇りて風吹き花散り急ぐ

鎮魂歌なれと唄はん「おお雲雀ひばり」思へば鳴き声遠く聞かざり

今年も大陸から黄沙が飛んできた。降雨の少ない香川県、ゆえに空海が多くの溜池を作つたとされる国だ。同県はかつて大変お世話になつた歌人香川進の出身地である。「流れゆく水の如しも」は鴨長明の『方丈記』を思い浮かべる方も多いであろう。

大谷ゆかり

（令和五年八月号）

足すべり此岸と彼岸の綱引きの砂地に白く煙のたちぬ

力なきわが手を残し春の夜の闇へとけこむ墨色の傘

癌に効くらしい蜂蜜シナモンを渡せなかった 駆け足雲

鯉たちが口まるくして父母ちちははの元気にそろそろ幸せを言う

難しき父に寄り添うふりがなのようなる母と肥えすぎの猫

小手毬の枝を大きく弾ませて見えない母がわたしをあやす



●作者の言葉

母は昨年四月の雨の夜に亡くなった。病院からの連絡が遅く（判断が難しいのだから）家族の誰も間に合わな

かった。母は苦しみから解放されて熟睡しているように見えた。今でもまだ「ゆかり、元気にしとる？」と電話がかかってくるような気がす

る。私は小手毬にあやされながらこの先も生きるつもりだけれど、母のいる場所へ行く日は、案外、あつと言う間に来そうだ。

母の挽歌で年間選者賞を頂くことになるとは夢にも思わず、その重みを感じている。横山未来子先生、ありがとうございます。

●選者の言葉

大谷ゆかりさんには不思議な作品が多い。現実をそのまま描くというより、比喩やイメージを用いて象徴的に表現するところに特徴がある。

八月号の作品は、「母」の病が背景にあるのだと思う。特選に選んだ際には一首目と二首目について記したが、その他の歌も印象深い。四首目は、水面でばくばく口を開けている鯉か、あるいは鯉のぼりのイメージか。「父母の元気にそろそろ幸せを言う」から、そうではない自身の状況の寂しさが浮かびあがる。六首目は、母のことで悲しんでいる「わたし」を、子どもの頃のようにまぼろしの母があやしてくれている。これまでの母との時間、いざれ訪れる別れの予感などが、せつなく胸に迫る一連だった。

鈴木香代子（令和五年十二月号）

日焼けした若肌美しき君を更新せずきてふいに熟年

与作呼ぶごとき声は遠畑に汗する君をよぶわれの声

冬火花きりきり散れば夜の闇は母体の昏さで収縮始む

赤松の青年命を落としたり松食い虫の侵攻止まず

どっと倒れ松のアニマが匂い立つ青き喪服の空が降りきぬ

弔いの白に化身のギンリヨウソウ森に静けく白の満ちゆく

鷲掴みの言葉生まれてこぬものかブナの緑がぐいぐい迫る



●作者の言葉

森を歩くのが好きだ。ほぼ毎日歩く。二つのアルプスに育まれたこの森に入ると、樹や風の声、森の内側に降る雪

の声、キャッチしきれなかった人の思いの声や、声にならないみずからの声、森を包む山の声。そうした声が聴こえてくる（ような気がする）。そ

れらの発する命の声のようなものを鷲づかみにして短歌にできたら、どんなに嬉しいだろう。私には高すぎるハードルなのだけれど、挑戦を続けてみたい。

斎藤佐知子先生、選者賞をありがとうございます。ありがとうございました。

●選者の言葉

毎月号の選歌ルームのタイトルは、特選一席に推した作品から、そのテーマに最も相応しいと思うひと言を選ぶことにしている。選者の推しの思いを伝えることでもあり楽しい作業である。鈴木香代子さんの題は「ぐいぐい迫る」であった。

日焼けした若肌の青年の記憶、昏く収縮する母体、倒木の松のアニマの香り、など肉体感覚が鋭く働いて、次に来る死のイメージへと繋がっていく。緻密に工夫された叙述ではなく、言葉を生ものとして捉えようとする願望からの表現であろう。作者の言うところの「鷲掴みの言葉生まれてこぬものか」の、鷲掴みされた言葉が、体温を持った実体としてぐいぐいと迫ってくるのである。熱い思いを持ち続けてほしい。

小宮教子

（令和六年一月号）

青空をずっと見ていた丘の上セルリアンブルーのネモフィラが咲く
晴れの日は風と暮らして雨の日は少し涼しい気持ちと暮らす
落下する檸檬の種を見届けてあなたはふいに話しはじめ
乗り換えのホームで待てばひとけなき時計の谷にひらくコスモス
長き長き列車過ぎゆく傍らに灯る廃車に住む家族あり
たましいが霞む霧雨心臓につめたいだけの森が広がる
茶器のなか手放すようにひらきたる茉莉花こんな晩年がいい
とつぷりと暮れてしまいいし清水港のかもめ埠頭に鷗群れおり

● 作者の言葉

この度は、思いがけずも年
間選者賞を頂くことになりま
した。私は、二〇二一年一月
に入会したばかりの新参加者で

すが、心の花の皆様の歌に大
きな刺激を受け、歌を作る楽
しみを得、幸綱先生はじめ選
者の皆様、先輩歌友の皆様の
ご指導のもとに歌を作って参

りました。

今回このような賞を頂きましたことを今
後の励みとし、私なりに歌の道を精進して
参りたく存じます。

この度は、谷岡亜紀先生そして編集部
の皆様、本当にありがとうございます。

● 選者の言葉

今年はこの作者の作品を二度、特選一位
に選んだ。去年八月号と今年の一月号であ
る。めぐり合わせとは言え、私の選歌欄で
は最も注目したうちの一人であると言え
る。一月号の作品では、「時計の谷」「廃車
に住む家族」など不思議なイメージが散見
される。私自身、作品の寓話性、寓意性を
意識して作歌しているので、そうした物語
性のある歌にまず注目した。ただし、その
ような作品は「荒唐無稽なお話」と紙一重
でもある。歌が、頭だけで考えた、ただの
作り物であってはならない、と願う。この
訳の分からない時代を生きる、「ただ一度、
唯一無二の私」の存在を、どう反映し得て
いるかが、成否の分岐点だろう。だからこ
の一連は、私自身への「問い」でもある。



堀亜紀

（令和六年五月号）

きさらぎの暁闇の雪の上に続く兵士達すぎゆきし靴跡

軍隊は殺人を教うるところなり風にひるがえる将校マント

土足にて雪崩込む暗き日本間に日常をバラバラと剥がして

ゆきぐもる山王ホテルの上空に「尊皇・討奸」の旗ははためく

「おまえたちのこころはヨオツクわかつとる」大将の声あまく響

きたりしか

電話にて合言葉を言うときの声少年めきたり栗原中尉

鎮圧軍迫れる夜の焚火ゆれ群衆に訴うる将校の見ゆ

雪いまも降り継ぎおらん東京市昭和十一年の二月に



●作者の言葉

この度は、本田一弘先生の年間選者賞を賜り、心より御礼申し上げます。二・二六事件は、戦前の日本の大きな転換

点となった近代史上の事件でありながら、かろうじて現代から手が届くところに以前からとても興味をひかれ歌に詠んでみたいと思つていまし

た。取り組んでみるととても難しく、感情が強く出過ぎたかどうかと提出した後思い悩んだり致しましたが、思いがけず本田先生に特選を頂き本当に嬉しかったです。また、年間選者賞を頂戴できるとのこと、心より感謝申し上げます。

●選者の言葉

堀亜紀さんが二・二六事件を題材に詠んだ意欲的な連作を今回の年間選者賞にした。連作の構成がいい。特に入り方が巧い。雪の上に残った兵士たちの靴跡、翻る将校マントが鮮やかに目に飛び込んでくる。三首目の「雪崩込む」は当日降った雪と重なり合う。「土足」で日本の民主主義を踏みじり、「日常」を壊していった将校たち。「剥がす」という動詞がリアル。四首目、「尊皇・討奸」という今では目にしない語が戦前の状況を象徴する。五、六首目のキーワードは「声」。視覚から聴覚への展開が絶妙。八十八年前と同じような不穏な空気が現代の日本にも漂っているのではないかとこの堀さんの鋭い危機感をこの連作から私は感じ取った。いい作品に出会えた。